In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	ワーズワスとフランス革命
Author	栗山，稔
Citation	人文研究. 25 巻 1 号, p.102-113.
Issue Date	1973
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	故西垣雄太郎教授追悼号

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

ワーズワスとフランス革命

栗　山　　稔

ワーズワスは1791年11月22日ロンドンを発ってブライトヘルムストンへ行く。彼はここで便船をえて，26日の夜イギリスを離れ，翌27日の朝ディエップに上陸，30日の夕刻パリに着く。そして12月5日パリを出発した彼は翌6日オルレアンに到着している[1]。こうして1年余に及ぶフランス革命の渦中の生活がはじまるのである。『序曲（プレリュード）』第9巻と第10巻の一部はこのフランス滞在を扱っている。

この時期にワーズワスはなぜフランスへ渡ったのだろうか。妹ドロシーは友人に「兄はフランス語の勉強のためにオルレアンにいます」と報じている。したがって，フランス語習得が親族のあいだで認められていた理由であったろう。同じ手紙には，帰国後「兄は近東のことばの勉強をはじめるでしょう」とも記されている。これはワーズワスがヘブライ語やアラビア語を勉強して，学問のある牧師となる準備をするように親族から期待されていたことを示している。せまい教区にしばりつけられる牧師にはなりたくなかったワーズワスが，この期待を回避しようとしたのは当然だろう。フランス語習得が回避の有力な口実にされた。フランス語習得は彼に「誰か若い紳士の旅行の相手」すなわち大陸旅行に出る金持の子弟のつきそい家庭教師「となる資格を与える」からである。このように別の就職資格となるフランス語習得を口実として彼は親族の同意をえたと考えられる。今日も大陸のことばはその国へ出かけて学ぶのが当然と考えられていること，また「イギリスにいてもフランスに行っても，まったく，あるいはほぼ同じくらいのわずかな費用で生活できる」ことを考えれば，親族が彼のフランス遊学を「不適当な計画ではない」と判断したのも当然であったろう[2]。ワーズワス自身も「自伝的備忘録」で「フランス語を流暢に話す勉強になるように，イギリス人の通るところをさけようと思ってオルレアンへ行った[3]」と言っている。また『序曲』(1805) 第9巻では，主として「フランス語をもっと気楽に話せるようになりたいという個人的な希望[4]」が彼をフランスへ導いたと書いている。彼も渡

仏の目的が親族の期待と同じフランス語習得であったことを否定してはいない。しかし彼が『序曲』ではフランス語をもっと流暢に話したいという彼の希望が「個人的」なものだったと断わっている点には注意を要する。これはドロシーの手紙が代表する親族の期待とは異なって，彼がフランス語習得と就職資格とを直結することを嫌っていたように思わせる。さらにこの表現は彼の渡仏の意図に親族の意図からはずれた何かがあったことを感じさせるのである。

ワーズワスは『序曲』(1850) ではフランス語習得への言及を削除し，前年の1790年の夏，アルプスをめざす徒歩旅行でフランスを踏破したときのことを思いだしながら，「フランスが私をいざないよせた[5]」と改訂した。彼の心をひいたものは，旅行中の書信[6]によって具体的にみると，フランス人の「礼節」，「真の博愛心」，「快活さ」，「陽気さ」等となるだろう。彼は旅行中に接したイタリア人，スイス人，ドイツ人と比較して，これらの美点をフランス人の特質と考える。ただ他の国民に公平を期するために，彼はつぎのようにつけ加えることを忘れなかった。「しかし私がフランスを横ぎったのは国民全体が革命の成り行きに狂喜していた時期であったことを注意しておかなければなりません。非常に興味のある時期にフランスにいたことになるのです。私は多くの楽しい場面をみましたが，その場景のおもしろさはひとえに上の理由に由来していたのです。」すなわちワーズワスの心を強くとらえて，ふたたびフランスへ赴かせた魅力は革命の成功に酔うフランス人が示していた多くの人間的美質であった。このように『序曲』(1850) は『序曲』(1805) にくらべれば，ワーズワスの関心を語学よりもいっそう革命に近づけている。そして1805年版で暗示されていた語学以外の渡仏の目的は革命にたいする関心であったと思わせる。しかし『序曲』の記述は革命下のフランスをみることが目的の一部であったと積極的に言うことを彼にためらわせた何かを感じさせるのである。

フランス到着後の記述も革命にたいする関心の低さを強調しているような印象を与える。なるほど彼はパリ到着の11月30日から出発の12月5日まで，とくに革命後の名所を駈けめぐっている。西はバスティーユ陥落1周年記念祭の会場となったマルスの広場，東はバスティーユの廃墟や聖アントワーヌの労働者街，北はモンパルナス，南はパンテオン霊廟を訪れている。ことにバスティーユの廃墟ではがれきの山から記念の石ころをひろい，「熱狂者をよそおって[7]」ポケットにしまいこむ。実際，心の奥底には革命に関して烈し

く動く歓喜がないわけではなかったけれども，彼は同時に「実際に感じた以上の感激をよそおいながら，みつけることのできない何かを求めている[8]」と感じないわけにはいかない。そこには何か別のものを期待して革命のフランスへ渡り，期待をうらぎられた，あるいはうらぎられることを知っている人間の冷えた心が感じられるように思われる。革命を記念するすべての事物も彼を感動させ，歓喜させる力の点で，シャルル・ル・ブランの描いたマグダレーヌの肖像画1枚にも及ばなかったというのは鋭いが，しかし痛ましい自己分析である[9]。またオルレアンに落ち着いてからも，ワーズワスは革命の衝撃をほとんど感じなかった点を強調する。「国中のすべてのかん木や樹木が根もとまで揺れているとき，私はガラスばりの温室のなかの花のように平穏といってよいくらいのん気で気楽だった[10]」そして彼はことば，風俗習慣，挙止，表情そのほか日常生活のあらゆる外貌の珍らしさに注意をうばわれていたのである。ここにも勢いこんで革命を語ることをちゅうちょする姿勢がみられるように思われる。

しかしわれわれはワーズワスがフランスにたいする関心の中心に革命を据えることにちゅうちょしているのではなく，事実「奇妙に思えるほど[11]」革命に無関心であり，彼の「若さにふさわしいと当然思われるほどには[12]」喜ばなかったのだという記述をことばどおり受け入れてみよう。そしてその理由を聞くことにしよう。ワーズワスはほかの人たちと同じように彼も当時の主要な政治論のパンフレットを読んでいたと言う。しかし眼前に偶発する事件を統合する助けとなるような，全体的な見通しを与える定期的な報道の類をみる機会をもたなかった彼には，すべての事件がばらばらで意味のないものにみえ，烈しい興味をかきたてることがなかったのである。ちょうど彼は「必要な知識も準備もなくふいに劇場へはいって行くと，舞台ではもう終りに近い幕がせっせと演じられていた[13]」ときのように呆然としていたと言うわけである。ワーズワスは第2の理由としてこの頃はちょうど革命の「最初の嵐が吹き過ぎて[14]」彼の注意をひく事件のとぼしい時期であったことをあげている。1791年9月14日ルイ16世は国民に忠誠を誓い，30日立憲議会が解散，翌10月1日には立法議会が成立し，「革命の目標は達せられた。何と幸福な資質を国民は回復したことだろう」という国王のことばを聞いた。そして忌避僧侶に厳しく公民宣言を要求する11月29日の法令がカトリック教徒のあいだに憤激をひろめるまで，国内の平和が乱されることはなかった。また亡命貴族や外国の勢力もこの平和を脅かすまでにはなっていなかったのである。最

後にワーズワスは彼が革命をあまりにも当然の事態と考えたことを大きな興味を呼びさまさなかった理由としている。彼には革命が「自然の必然的な流れをはずれているとは思われず，むしろそれは届くのが遅すぎた贈物」[15]であった。彼は幼，少年時代を通じて富や血統のために尊敬されている人間をみたことはなかった。また青年時代を過した学都ケンブリッジも共和国に似た世界で，給費生も豊かな自費生も平等な同胞であった。栄誉への道は富や称号によってではなく，才能と勤勉によって全員に開かれていた。その上，幼年時代以来「神と自然のただ一つの主権」，「畏るべき力の身近かな顕現」[16]にだけ服従して来た彼には，地上の「帝王の笏もはなやかな位階」[17]もとるに足りないものにみえていたのである。このような人間によって構成される社会の実現をめざすのがフランス革命であり，したがって，国王を頂点とする旧制度が「ただ一つの主権」のまえにその権威を失墜するのは当然の事態であったというわけである。

ワーズワスにとって「身近か」に感じられていた「畏るべき力の顕示」とは，彼が幼年期から青年時代にさまざまなかたちで体験した自然との融合であり，その体験を通じて宇宙に浸透するある力が彼に啓示されたことであろう。われわれは幼，少年時代のワーズワスがいわば堕落以前の人間，あるいは「祝福された霊」，「天使」[18]として「畏るべき力の顕示」に満ちみちた楽園ホークスヘッドに住んでいたことを知っている。『序曲』はまず「天使」としてのワーズワスと自然の事物を通じて「顕示」される「畏るべき力」との交渉の記録としてはじまっていた。やがてケンブリッジへ出たワーズワスは楽園から来た「天使」として地上の世界にあいたいした。ケンブリッジは地上の世界とは言っても，今彼が理想的な共和国として思いおこしているように，いわば楽園といっそう堕落した現実世界とのあいだの中間的な世界であった。[19]それにもかかわらず彼はケンブリッジにみた地上的現実世界に烈しい衝撃を受け，これを楽園の基準によって批評し，ひたすら楽園への復帰を願ったのだった。しかし地上的な現実世界との交渉が深まるにつれて，彼は永久に「天使」として楽園にとどまることは許されないし，またとどまるべきではないと悟る。そしてロンドンの経験が暗示しているように，彼はこの天使的存在としての生き方に強い憧憬を残しながら，これを超えて，現実世界を受け入れ，現実世界のすべてを荷う悲劇的な人間的存在としての生き方をいっそう強く希求しはじめるのである。このときかって彼に「身近か」であった「畏るべき力の顕示」は，自然の事物を媒介とする神の力の現われであ

ったという宗教的な理解を与えられ，この力の「主権」にしたがうことが精神のよりどころとなったのである。

われわれは「自然と神のただ一つの主権」，「畏るべき力の身近かな顕示」にのみ服従する人間という表現から，上のように人間の天使的存在様式と人間的存在様式とを思い出さざるをえない。そしてワーズワスの精神の成長の軌跡をたどってきた読者は，革命を当然と考え，また革命の実現する社会の構成員を後者にしたがって生きる人間と考えるだろう。しかし後者，すなわち人間的存在様式は，社会がいかに民主的な原理で統治されようと，またいかに物質的に繁栄しようとそのような外的条件には影響されない根本的に悲劇的な人間のあり方であるから，これは革命の目ざす社会改革と直接結びつくものではないのである。したがって革命をみるワーズワスの心底には人間を天使的存在とみる考えが復活していたのではないかと考えられる。そうすれば彼が革命によせた情熱を一種の後退と考え，そのため情熱の表現をおさえる意識が働いたということもありうるだろう。この点をつぎに検討してみることにしよう。

ワーズワスは革命についての知識の不足，比較的安定していた情勢，そして革命を当然すぎることとする気持のために革命に関心がもてなかったと言った。このような彼の関心を革命にむかわせた原因は，『序曲』の叙述の順序にしたがえば，第1に王党派によって革命に加えられた偏見にみちた攻撃であった。オルレアンのワーズワスの止宿先にはほかに4人の下宿人があり，うち3人は騎兵隊の士官であった。やがて翌年の早春ブロワへ移った彼はここでも陸軍の将校たちを同宿人とした。2つの町を舞台とするこの将校たちとの交際は，他の多くの場合と同じように『序曲』では「ロワール河畔のある町」[20]での出来事として融合されている。この士官たちはすべて上流階級の出身者であり，1人を別にすれば「起った事態をもとにもどすことに腐心」[21]する王党派であった。ワーズワスはこの士官たちと交際するうちに革命を「自然の必然的な流れ」とは考えない人々のいることを知ったのである。そして彼等に反論するために彼のかくれた熱意はまるで「極地の夏のように一時に盛りとなった」[22]のだった。今注意すべきはこの王党派の士官たちの描写が強く堕ちた天使たちを連想させる点である。R．J．オノラートウは最近の研究で，この描写[23]は「『楽園喪失』第2巻の絶望的な堕天使どもの会議の描写を明瞭に思い出させる書き方」であると指摘している。またとりわけ詳細に記述される1人の士官[24]について，「美しさを破壊されてしまった肉体，

腹だたしい思いに苦しめられている精神，落ちつかない身体の動き，復讐心にもえて剣をまさぐる指，すべてがミルトンの描いたセイタンを暗示し，同時に心の深部を烈しい感情に食いあらされた，男らしい印象的な人物を暗示する」と書いている。[25] たしかにミルトンのセイタンも，たとえ「容姿の輝きは変った」としても，彼をかっての栄光の座から追った神にたいする「抜くべからざる憎悪」にもえている。そして復讐のため単身地球へ飛ぶ英雄的な一面をそなえているのである。このようにワーズワスが王党派の士官たちを堕ちた天使たち，そのうちの1人をセイタンとしてとらえているとすれば，堕ちた天使達が敵対した天上の神，あるいは神には及ばずとみて当面彼等が奸計による攻撃の対象とした楽園のアダムとイブ，堕落以前の人類の祖先を革命の勢力と結びつけていたと考えないわけにはいかない。

ワーズワスの関心を革命にむかわせた原因の第2は革命に献身する平凡な市民であった。彼は亡命貴族や介入をはじめた外国の兵力に対抗するために国境へ配備されていく兵士やその家族に，愛国心，もっとも強固な自己犠牲の精神，献身，博愛心，克己心，正義感，希望，殉教者のような確信，泰然とした忍耐等多くの美質をみて感動する。これは彼が『序曲』(1850) で「フランスが私をいざないよせた」と書いたとき，彼がフランスに感じていた魅力の核心にあったものと同じである。これらの美質は先に天使的存在様式と対照して人間的存在様式と呼んだ生き方にしたがう人間にもっとも多量にみいだしうるものである。しかし第2の存在様式が旧体制，革命といった政治制度とは次元を異にする問題であることはすでに指摘したとおりである。そのように考えるとこれらの美質が発揮される光景に別の意味が与えられていることに気づくのである。ワーズワスはこれらの光景がしばしば彼の精神を高揚させたことにふれ，続けてこれらの光景は革命の正しさについての「天の論証のように思えた」[26] と言っている。すなわち革命に献身するフランス人の一人一人が天と結びつけられているわけである。また革命に立ち上ったフランス国民を，暁の空にひとり輝き出た「明けの明星」になぞらえた箇所もある。明けの明星を聖書にしたがって堕ちる前の大天使ルシファーと解釈することが許されるとすれば，ここでもフランス人は天使と結びつけられているわけである。しかし明けの明星がやがて空から姿を消すように，大天使ルシファーは天を追われて地獄のセイタンとなる。そのようにフランスもやがてロベスピエールのもとで，さらにナポレオンのもとで，革命頭初の大義を放棄して，侵略主義的国家へと堕落していく。ワーズワスはロベスピ

エールをセイタンとともに地獄へ落ち，「人間のいけにえの血によごれた恐ろしい王」[27]モウロックになぞらえる。[28]これはきわめて適切な比較であると同時に彼が一貫して反革命を堕ちた天使，地獄に，革命を天，善天使，楽園と結びつけていたことを示している。

このようにワーズワスは革命を荷ない，革命の実現する社会に住む「自然と神のただ一つの主権」にのみ服従する人間を，強く天を連想させるイメージによって，幼，少年時代の彼自身に，すなわち天使的存在に近づけていることが理解できる。さらに傍証として第10巻のロベスピエールの死を語る一節[29]を提出することができるだろう。ワーズワスは1792年11月下旬，あるいは12月上旬に帰国し，その後，彼の革命の理念からますますはなれていく現実の情勢や，ロベスピエールとその一派ばかりでなく，彼が天使に擬したフランス人にたいする祖国の開戦などによって長い苦悩を強いられていた。そして彼は彼の革命の理念とはあい入れないロベスピエールがギロチンにかけられたことを知るのである。ロベスピエール刑死の知らせを聞く直前，彼は滞在中のランカシャーのとある寒村への帰途，遙かな故郷の空につぎのような光景をみる。

Over the smooth sands
Of Leven's ample estuary lay
My journey, and beneath a genial sun,
With distant prospect among gleams of sky
And clouds, and intermingled mountain tops,
In one inseparable glory clad,
Creatures of one ethereal substance met
In consistory, like a diadem
Or crown of burning seraphs as they sit
In the empyrean. Underneath this show
Lay, as I knew, the nest of pastoral vales
Among whose happy fields I had grown up
From childhood.[30]

このきわめてミルトン的な一節は故郷を天使，楽園と結びつけて回想する数多くの箇所の一つである。そしてこのような光景を目のあたりにみて，故郷

の楽園に思いをはせていることがロベスピエールの死に関する彼の感慨に大きな影響を及ぼさずにはおかない。ロベスピエールの死に歓喜したワーズワスは人間によせてきた彼の信頼の正しさが証明された，不当に遅らされたけれども「偉大な革新」[31]は「正義と平和をめざして進行し」[32]やがて「黄金の時代」[33]が来るだろうと叫ぶ。この「黄金の時代」が直前におかれた一節の影響をこおむって，彼の少年時代の楽園に非常に近い意味を持つことになるのである。またこの歓喜は少年時代に遠乗りに出て聖メアリー寺院の廃墟を訪れた日を思い出す美しい一節へとつながり，「黄金の時代」と彼の少年時代との関係をいっそう緊密にしているのである。

ワーズウスの革命の理解がこのように独自なものであったことは『逍遙篇』(エクスカーション)からも証明できる。この作品でワーズワスの一面を代弁する＜孤独の人＞が，家庭の不幸のあまりおちいった放心状態から，フランス革命によってよみがえったことを回想する一節[34]がある。＜孤独の人＞は革命がもたらすであろう現実界の変貌を，昔，彼がみた天上の都のヴィジョン[35]になぞらえる。

A single step...
　　opened to my view
Glory beyond all glory ever seen...
The appearance, instantaneously disclosed,
Was of a mighty city...
Fabric it seemed of diamond and of gold,
With alabaster domes, and silver spires...
Such as by Hebrew Prophets were beheld
In vision...
That which I saw was the revealed abode
Of Spirits in beatitude.

ここでもワーズワスは＜孤独の人＞の口をかりて，彼が革命を地上に神の国を建設することと感じていたことを，いっそう聖書的なことばで表現しているのである。

このようにフランス革命に独自な意義を与えることはひとりワーズワスに限られたことではなかった。たとえばブレイクは『フランス革命』(フレンチ・レボルーション)において旧制度と革命の両勢力の戦を，彼の独自な神話の登場人物，すなわち堕落し

た理性のいっさいの権威を表わすユアリゼンと，ユアリゼンの権威が生み出したすべての悪を否定する怒を象徴するロスの戦としてとらえていた。そしてロスの勝利が人類の新生をもたらすという主張をヨハネの黙示録の記事を利用しつつ展開したのだった。またコウルリッジは『宗教的瞑想（リリジヤス・ミユージングス）』や『諸国民の運命（パステイニー・イブ・ネイシヨンズ）』で，人類の歴史が宇宙の根源的エネルギーとしての神の御業によってひたすら至福千年（ミレニアム）をめざして進んでいくという考えを展開した。そして神の最後の審判はすでにフランス革命というかたちをとってはじまっており，革命のあとには至福千年が到来することを，同じようにヨハネの黙示録のイメージを用いて語ったのだった[36]。

最後に，革命にたいするワーズワスの関心を目ざめさせるのにもっとも重要な役割をはたしたミシェル・ボーピュイの描写に，同じイメージがあるかどうかを検討しなければならない。ワーズワスに影響を与えた人物のなかで，『序曲』に名前を記録して感謝をささげられているのは4人にとどまっており，ボーピュイがその一人であることは彼の影響の重要さをしのばせるのである。彼はワーズワスが同宿した士官のなかでただ一人の共和主義者であり，仲間の士官からつまはじきされていた。ワーズワスは「しばしば二人きりで私は彼と語りあった[37]」と言っている。そして話題はかなり政治理論にかかわるものであったように思われる。それはたとえば「市民政治の目的とそのもっとも賢明な形態[38]」，「旧来の偏見と特許の権利[39]」，「もっともいやしい魂のもち主がもっとも栄える[40]」宮廷にたいする攻撃，「一人の意思が万人の法となる独裁的統治にたいする憎悪[41]」であり，長期にわたって抑圧されていた農民の貧困であった。そして子牛を大儀そうにひいて小道を行く「飢えにさいなまれた小女[42]」をみて，ボーピュイが「われわれが戦っているのはこういうことをなくすためだ[43]」と叫んだとき，ワーズワスもこのような貧困，不正な権力の消滅した「すべての人類にとってより良い日々[44]」の到来を祈念するのだった。しかしワーズワスにとって革命はいぜん「哲学者にひきいられた哲学的な戦[45]」であり，ボーピュイはじめその指導者は「神の権威によって是認された[46]」，「救済者の栄光の仕事[47]」に従事する者であった。そして彼等の実現する世界は「まことの個人の尊厳[48]」，「神の賜物である人間の高貴な本性[49]」等が完全に発揮される世界として予見されているのである。このようにボーピュイとの交際は革命にたいするワーズワスの傾倒を強めたけれども，彼の独自な革命の理念を変更させるものであったとは思われない。そしてなによりも彼の描いたボーピュイの肖像がこのことを確証していると言える。

A meeker man
Than this lived never, or a more benign,
Meek though enthusiastic to the height
Of highest expectation. Injuries
Made him more gracious, and his nature then
Did breathe its sweetness out most sensibly,
As aromatic flowers on Alpine turf,
When foot hath crushed them.[50]

「《侮蔑が彼をいっそうやさしくした。》高い身分に生れながら彼は《目に見えぬ絆によって，身分卑しい人々，無名の人々》に結びつけられていた。愛をこめて自から選んだ人々のために命を投げだす人として，彼はわれわれにキリストを思わせる…」とオノラートウは論じている。[51]これは首肯できる読みであり，また王党派の士官にセイタンをみた彼としては当然の意見であろう。

ところでワーズワスが根底において革命をこのように美しい詩的な理念でとらえていたということは，彼が現実に成起する政治事件をみる目を欠いていたということを意味するものではない。実際，彼は革命の推移についてきわめて賢明な政治的判断をも示すのである。たとえば恐怖時代を説明する一つの事実として，イギリスの対仏宣戦がジャコバンの過激派に革命政府の独裁的，軍事的な中心となる公安委員会設置の口実を与えたこと，またジャコバンの過激派を八つの党派がそれぞれ非常に異なった理由から支持したことを指摘して，恐怖時代の複雑な力関係に理解を示した箇所[52]がそれである。それは同時代人としてはすぐれた政治的洞察力であった。[53]このような現実的な政治的判断を示すワーズワスはジロンド党にもっとも共感をよせて，その主導権のもとに革命が進行して，フランス人のために真に自由，平等，博愛の原理にもとずく社会が実現されることを悲願としていた。フランス革命のうえに地上の楽園のイメージをみようとしたワーズワスを，この現実家ワーズワスが背後から醒めた目でみまもっていた。この醒めたワーズワスが詩的なイメージで革命を語ることをちゅうちょさせた一つの原因となっただろう。

しかしさらに重要な原因は『序曲』第7巻でワーズワスが到達したことを暗示した人間的存在様式の理解である。この理解は実際には革命にたくした

夢を破られたあとで彼が到達したものであるかも知れない。すなわち『序曲』第7巻に描かれているロンドン滞在の記録にはフランスへ出発する前の約3ケ月半の滞在のほかに，1792年11月または12月の帰国から'93年7月上旬頃までの滞在，さらに1795年2月上旬から8月までの滞在の経験が，ちょうどオルレアンとブロワの経験が融合されたように，融合されている可能性がある。しかし実際の伝記上の事実がどうであれ，作品『序曲』ではワーズワスはこの理解を革命の前においているのである。したがって『序曲』では彼がこの理解によって超えたはずの天使的存在としての人間を革命のうえにみることにたいするちゅうちょが現われることとなったのである。

このような作品構成がほかにも微妙な陰影を生んでいるように思われる。たとえばワーズワスが共和主義者となったことを述べる箇所にそれがある。[54]

> I gradually withdrew
> Into a noisier world.[55]

彼は「ロアール河畔にある町」に落ちつくとしばらく上流階級のクラブに出入りして，酒を飲み，トランプに興じていた。上の表現の中心は彼の足がこのような社交場からだんだん遠のいていったことにあり，革命に歓喜する民衆の中に身をおいたことをその結果として表現したのである。これから革命によせた情熱を語ろうとする瞬間にこのような消極的な表現がまぎれこんだのは，この情熱をすでに超えて，革命の成否とはかかわりのない境地を追求しているワーズワスがいるからである。

また同じ理由から第9巻でもっとも印象的なボーピュイ像にも微妙な二重性が生れる。彼の映像の一面がキリストと結びつくことはすでに指摘した。しかし同時に彼を踏まれたときもっとも馥郁と香るアルプスの花にたとえた箇所はまた別の人間像とも結びつくのである。それは，たとえば，

> now his feet
> Crush out a livelier fragrance from the flowers
> Of lowly thyme, by Nature's skill enwrought
> In the wild turf[56]

のような表現を媒介として第8巻の羊飼と結びつくのである。ワーズワスの

回想に浮ぶ羊飼は時には霧をぬってその姿を拡大され，またときには落日の深い輝きによって栄光の背光につつまれて出現し，たしかにあの「よき羊飼」を連想させる。しかし第8巻ではワーズワスはこの羊飼がけっして「よき羊飼」でもなければ，また古典牧歌に歌われる理想郷の羊飼でもなく，現実の苦悩を毅然として荷って生きる人々であったことを悟ったと言っているのである。そして羊飼の栄光の姿は彼にとって新しい意味をもちはじめ，そのような人間の尊厳の象徴となったのである。ボーピュイにワーズワスの革命の理念にそった「よき羊飼」をみることはもちろん正しい。しかし同時にわれわれは別の羊飼の姿をもみなければならないのである。

注

1 1791年12月19日付兄 Richard 宛書簡参照。 2 以上の引用は1791年12月7日付 Jane Pollard 宛 Dorothy の書簡より。 3 Grosart, A. B. (ed.) : *The Prose Works of William Wordsworth* (1876, rpt. A. M. S.), Vol. 3, p. 222. 4 IX, 36－7. 5 IX (1850), 34. 6 1790年9月6日－16日付 Dorothy 宛書簡。 7 IX, 66－7. 8 IX, 70－1. 9 IX, 72－9. 10 IX, 86－9. 11 IX, 91. 12 IX, 250. 13 IX, 91－4. 14 IX, 108. 15 IX, 252－3. 16 IX, 237－8. 17 IX, 211－2. 18 IV, 228－9. 19 III, 542－64 参照。 20 IX, 39. 21 IX, 136. 22 IX, 259－60. 23 IX, 133－42. 24 IX, 142－63. 25 Onorato, R. J.: *The Character of the Poet* (Priceton U. P., 1971), pp. 316－7. 26 IX, 287－8. 27 *P. L.* I., 392－3. 28 X, 469. 29 X, 467－567. 30 X, 475－87. 31 X, 557. 32 X, 553. 33 X, 542. 34 III, 706－834. 35 II, 827－81. 36 拙稿「ブレイクとコウルリッジの予言の声」(『人文研究』15巻3号) 参照。 37 IX, 327－8. 38 IX, 328－9. 39 IX, 330. 40 IX, 349－61. 41 IX, 503－4. 42 IX, 511. 43 IX, 518－9. 44 IX, 532－3. 45 IX, 422－3. 46 IX, 412－13. 47 IX, 416. 48 IX, 355. 49 IX, 363－4. 50 IX, 297－304. 51 Onorato: *ibid.*, pp. 320－1. 52 X, 308－29. 53 Dicey, A. V.: *The Statemanship of Wordworth* (Oxford, 1917), p. 43. 54 拙稿「ワーズワスとロンドン」(『季刊英文学』7巻4号) 参照。 55 IX, 122－3. 56 VIII (1850), 241－4.